駒の出土例とその意義

小泉信吾

はじめに

昭和48年，福井県一乗谷朝倉氏遺跡本館跡北側外濠の調査によって174枚にも及ぶ大量の将棋の駒が出土した。これを嚆矢とし，管見の知る限りでは日本では22例，海外では1例を数え今日に至っている。将棋（中国将棋・朝鮮将棋及びチェス等を含む）の起源は古く，約2000年前の古代インドで行われていた「チャトランガ」(注1)という盤上遊戯に由来している。しかし今日の日本将棋に至るまでの変遷過程や，その伝来についての研究は学として，あまりに放擲された感があり，更に既刊の概報及び報告書の中で駒についての記載で基本的な誤りも見られる。また木簡や他木製品と比べて，その資料としてのあつかいは意外とぞんざいな例もあり，既に2遺跡では駒の存在もさだかでない。それゆえ，ここに拙稿をもって出土駒について若干の研究を試み，その意義を叙述してみたい。

駒の出土状況と特色

前述したように海外を含めこれまで23例の出土を数えているが，朝倉氏遺跡の出土例ほど大量の例はなく，一遺跡から2～3枚の出土が通常であった。朝倉氏遺跡の例を特殊と見るか，また遺構によって遺物の保存状態が良好であれば，それが通常の状態であるのかは今後の課題に残すとしても，現段階で朝倉氏遺跡の駒は多くのことを語ってくれる貴重な資料である。さて話を他の遺跡に戻すとして，これまで確認された例は〔表-1〕に示した通りである。古くは平安時代後期に遡り，新しいところでは明治に至っている。

時代としては室町時代から安土・桃山時代にかけての出土例が多く，特色として館跡及び城跡からの出土が比較的よく見られる。おそらく平安時代から鎌倉時代にかけて貴族及び僧侶等の間で行われていた遊芸が，将棋を含めて武士階級及び庶民層にも波及していったことを示しているのかもしれない。資料として平安時代後期から末期に位置づけられる例は，山形県酒田市・城輪遺跡〔図1-1〕，京都市・鳥羽離宮遺跡第77次調査出土〔図1-2,3〕の2例である。また，鳥羽離宮遺跡では第54次〔図1-12〕・59次〔図1-13〕調査の際に出土しており，駒の他にも豊富な資料を提供してくれる。さらに都から遠く離れた，古代出羽国の国庁跡と推定される城輪遺跡から出土した駒は，当時の将棋の普及範囲を示す意味でも

付表1　出土駒一覧表

1.	山形県・酒田城輪遺跡	平安時代後期
2.	京都府・鳥羽離宮第77次調査	平安時代後期
3.	兵庫県・玉津田中遺跡	鎌倉時代初期(13世紀初頭)
4.	神奈川県・今小路周辺遺跡	鎌倉時代後期(13世紀前半)
5.	神奈川県・千葉地遺跡	鎌倉時代後期(13世紀末)
6.	京都府・鳥羽離宮第59次調査	鎌倉時代頃
7.	韓国・新安沖海底船	鎌倉時代末期(1323年頃)
8.	神奈川県・鶴岡八幡宮	鎌倉時代～南北朝
9.	京都府・上久世城ノ内遺跡	鎌倉時代末期～南北朝
10.	京都府・鳥羽離宮第54次調査	鎌倉時代～桃山時代
11.	長野県・塩田城跡	鎌倉時代頃
12.	静岡県・小川城跡	室町時代～戦国時代(15世紀後半～16世紀前半)
13.	京都府・猪熊殿跡	室町時代末期(16世紀中頃)1536～1547年の間 天文法華の乱で本国寺焼亡以後
14.	島根県・新宮党館跡	室町時代末期(16世紀中頃以前)1554年以前
15.	富山県・弓庄城跡	室町時代末期～戦国時代
16.	福井県・朝倉氏遺跡	室町時代末期(16世紀後半)下限は1567年前後
17.	兵庫県・御着城跡	室町時代末期(16世紀後半)下限は1571年直前
18.	東京都・葛西城跡	室町時代～江戸時代(16世紀前半～17世紀前半)
19.	京都府・平安京西洞院	戦国時代末期～江戸時代初期(16世紀末～17世紀初頭)
20.	京都府・御土居遺跡	江戸時代前期(17世紀中頃～17世紀後半)～明治頃 共伴木簡記年銘より1654～1675年の間(図1-24, 25)
21.	大阪府・難波宮跡	江戸時代前期以降
22.	京都府・隼上り遺跡	江戸時代末期
23.	岩手県・高水寺城跡	新聞報道及び関係機関によって出土したことは事実であるが詳細はわからない。

意義深い。おそらく，このことから考えて遅くとも平安時代の後期には，全国に将棋が普及していたものと思われる。一方文献の方では，藤原行成によって著されたと云われる「麒麟抄」(注2)の中で将棋の駒についての記載があり次のように書かれている。

「真ニモ書。行真ニモ。細堅クユラメキテ可書。造馬ノ半上鮮々ト四角，点行真ニ緩々ト可書。金ヲハ極草可書。台ニ入テ持手ニ可書。」と，かなり詳細に述べられている。「金ヲハ極草可書」の部分は，金将の意味ではなく，駒が成った場合と所謂「成金」の意味であり，成金を草書で書けと規定している点も興味深い。

また12世紀初頭頃の史料によったとされている百科全書的な「二中歴」(注3)に大・小2種類

の将棋の説明があり，平安時代には確実に２つの将棋が存在していたことがわかる。同じく「二中歴」には将棋の他に，囲碁・弾棊・双六等の遊芸について記載があり，当時の貴族層の生活の中で，遊びの部分が大きなウェートを占めるようになっていたのだろう。

第１図　NHK 放映「韓国・新安沖　謎の沈没船」より転写

さらに時代は進むが，日本ばかりでなく韓国・新安沖の沈没船(注4)が引き上げられた際に大量の陶磁器のなかに混じり，将棋の駒〔第１図参照〕が確認されている。

また共伴遺物の墨書木札に記年銘，元亨３年(1323)の記載があり確実に年代が辿れる。同じく海外の例では，中華人民共和国・福建省泉州湾より宋代の海船(注5)から中国将棋の駒が検出されている。中国の例は新安沖の例より約50年ほど前になり諸事情も異なるだろうが，いずれも航海の暇を見つけては楽しんでいたものと思われる。さて，話しをこのへんで日本に戻し，出土例を遺跡の種類で分類した後，紹介してみたい。

都城・宮殿跡	京都・鳥羽離宮遺跡，第54次・第59次・第77次調査。
地方官衙	山形・城輪遺跡。
中世都市・集落	兵庫・玉津田中遺跡。神奈川・今小路周辺遺跡。神奈川・千葉地遺跡。京都・猪熊遺跡。神奈川・鶴岡八幡宮境内。京都・上久世城ノ内遺跡。
中世城館	静岡・小川城跡。長野・塩田城跡。島根・新宮党館跡。富山・弓庄城跡。福井・朝倉氏遺跡。兵庫・御着城跡。東京・葛西城跡。岩手・高水寺城跡。
近世都市	京都・御土居遺跡。京都・平安京西洞院。大阪・難波宮跡。京都・猪熊殿跡。

当然遺跡の性格については推定段階のものもあり，古代から近世までの複合遺跡もあるが上記に示したものは遺構及び遺物から推定している。またこの他に将棋の駒とは考えられないが，形は駒形を呈した木製品を出土した遺跡に，広島・草戸千軒町遺跡がある。おそらく駒を転用したもので聞香(注6)か闘茶の札に使用したと考えられる。それでは各遺跡及び遺物について述べてみたい。

〔平安時代～鎌倉時代の出土例〕

山形・城輪遺跡　〔所在地〕　山形県酒田市大字城輪

〔調査年度〕　昭和54年　〔調査機関〕　酒田市教育委員会　〔遺跡の種類〕　官衙(出羽国庁

跡？）〔遺跡の年代〕 平安時代 〔遺跡遺物の概要〕 水田遺構とみられる所の井戸より出土，直径約80cmのなかに，灰釉陶器や緑釉陶器の破片や木簡とともに駒〔図1-1〕が1枚出土した。大きさは縦3cm・底部幅1.5cm・厚さ0.3cmで，表「兵」裏「ゑ」と墨書されていた。駒の年代は，他の共伴遺物から見て平安時代後期の所産と考えられる。現段階では，後述する鳥羽離宮第77次調査出土駒と併せて最古の例である。注目すべきは「兵」と表記されている点で，これは中国将棋に見られる「兵」との関連性を惹起させるが，裏面が金の略字「ゑ」と書かれている点から考えて単に「歩兵」の一字を省略して「兵」と表記されたのであろう。この駒が果して「二中歴」の記載にある，将棊・大将棊の範疇に含まれるものか，或いはそれらを改良した現在の将棋に近いものかは今のところ判断は出来ない。

鳥羽離宮跡第77次調査 〔所在地〕京都市伏見区竹田内畑町

〔調査年度〕 昭和57年8月3日～同年11月20日 〔調査機関〕 京都市埋蔵文化財調査研究所 〔遺跡の種類〕 宮殿跡 〔遺跡の年代〕 平安時代～江戸時代

〔遺跡及び出土駒について〕 調査地は離宮東殿の推定地にあたる。調査で確認された遺構は，溝SD1・2及び柱穴であり，遺構は遺物から見て平安時代後期と考えられる。駒〔図1-2,3〕は溝SD2より2枚出土し，共伴遺物に土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器がある。木製品では楽人が描かれた板絵・木簡・人形・球・下駄・櫛・箸等を検出している。一枚は，表「歩兵」裏「と」と墨書されている。大きさは，縦2.3cm・底部幅1.5cm・厚さ0.4cmで完存。もう一方は墨書が一部に認められるが判読はできない。大きさは一部に欠損があるものの，縦2.6cm・底部幅1.5cm・厚さ0.3cmを呈している。

鳥羽離宮跡第54次調査 所在地・調査機関・遺跡の年代，種類は上記に同じ。

〔調査年度〕 昭和54年 〔遺跡及び出土駒について〕 離宮東殿の推定地にあたる部分で調査地を東西に走る幅6m・深さ1.5mの溝の底から他の木製品といっしょに1枚出土。溝は鎌倉時代から桃山時代にかけて何回か掘りかえされており駒もその範囲に含まれる。駒〔図1-12〕は表「銀将」裏「ゑ」で金の略字と考えられる。大きさ，縦2.8cm・底部幅2.2cm・厚さ1.3cmを測る。

鳥羽離宮跡第59次調査 所在地・調査機関・遺跡の年代，種類は上記に同じ。

〔調査年度〕 昭和55年 〔遺跡及び出土駒について〕 離宮東殿推定地の東側を南北に流れる幅6m・深さ1.5mの溝内より出土。駒の他に土師器・瓦器・輸入陶磁器・木製品が出土しており，これらの遺物から見て鎌倉時代の所産と考えられる。駒は一枚出土しており約1/2程度欠損している。駒〔図1-13〕は表「金将」裏は判読しにくいが「飛車」の可能性が強い。現在では殆ど指されなくなった「中将棋」の駒と考えられる。大きさは現存で，縦

1 山形・城輪遺跡　2 京都・鳥羽離宮第77次調査　3（同　左）　4 兵庫・玉津田中遺跡

5 神奈川・千葉地遺跡　6（同　左）　7 神奈川・鶴岡八幡宮境内　8（同　左）

9 神奈川・鶴岡八幡宮境内　10（同　左）　11（同　左）

12 京都・鳥羽離宮第54次調査　13 京都・鳥羽離宮跡第59次　14 長野・塩田城跡

15 島根・新宮党館跡　16 富山・弓庄城跡　17 福井・朝倉氏遺跡第９次調査

18 福井朝倉氏遺跡第49次調査　19（同　左）　20 兵庫・御着城跡

21 東京・葛西城跡　22（同　左）　23 京都・西洞院

24 京都・御土居遺跡　25（同　左）　26 大阪・難波宮跡

第２図　実　測　図　S＝$\frac{1}{2}$

3.9cm・底部幅2cm・厚さ1cmを測る。以上，都合4枚の駒が鳥羽離宮跡から出土しており，今後もさらに出土する可能性が強く，大いに期待できる遺跡である。

京都・上久世城ノ内遺跡　〔所在地〕京都市南区久世上久世町城ノ内

〔調査年度〕昭和51年　〔調査機関〕六勝寺研究会

〔遺跡の種類〕中世集落　〔遺跡の年代〕鎌倉～室町時代頃

〔遺跡及び出土駒について〕建物跡の周囲にめぐらされた幅7～8mの堀から出土。第四層と呼ばれる粘土層から，土師器，瓦器，鏑矢，漆器，木片といっしょに検出され，瓦器の型式に従えば14世紀の中頃の所産と考えられる。駒は判読しにくいが，表「酔」と墨書され裏は消えていた。大きさは，縦4cm・底部幅2.2cm・厚さ1cmを測る。表面「酔」から判断して，中将棋の駒にある「酔象」と思われる。

兵庫・玉津田中遺跡　〔所在地〕兵庫県神戸市西区玉津町田中字池の内

〔調査年度〕昭和59年　〔調査機関〕兵庫県教育委員会　弥生時代～鎌倉時代

〔遺跡及び出土駒について〕駒が出土した遺構は平安時代末期から鎌倉時代頃の庭園の池部分と推定されている。駒〔図1-4〕は表「桂馬」裏「今」と墨書されている。大きさは，縦2.9cm・底部幅1.8cm・厚さ0.55cmを測る。駒の年代は共伴須恵器の碗が13世紀の初頭に位置づけられることから，ほぼ同年代と考えられる。「桂馬」としては最古の例であり，現行の将棋に近いものと考えられる。

神奈川・千葉地遺跡　〔所在地〕神奈川県鎌倉市御成町15-5

〔調査年度〕昭和55年3月～同年9月16日　〔調査機関〕千葉地遺跡発掘調査団

〔遺跡の種類〕中世館　〔遺跡の年代〕13世紀中頃～14世紀後半

〔遺跡及び出土駒について〕遺跡の東南部，西側の一画を「千葉地」と称し千葉氏の屋敷地と伝えられる。駒の出土した遺構面は第3・4面で各1枚ずつ検出されている。第4面は共伴遺物からみて13世紀末期と考えられ，「金将」と推定される駒〔図1-6〕が1枚出土している。表〔金ゝ〕」と墨書され，裏は消えている。大きさ，縦3cm・底部幅2.8cm・厚さ0.3cmを測る。第3面は同じく共伴遺物から見て14世紀前半と考えられ，「歩兵」と推定される駒〔図1-5〕が1枚出土している。表は摩滅しており，裏は「と」と墨書されている。大きさは，縦3.4cm・底部幅1.9cm・厚さ0.35cmを測る。

神奈川・鶴岡八幡宮境内　〔所在地〕神奈川県鎌倉市雪ノ下

〔調査年度〕昭和55年～57年　〔調査機関〕鶴岡八幡宮境内発掘調査団

〔遺跡の種類〕社寺境内　〔遺跡の年代〕鎌倉時代～現代，中心は鎌倉～室町時代。

〔遺跡及び出土駒について〕治承4(1180)年源頼朝が父祖の地，鎌倉に入り約150年間に及び東国の大都市として栄えた鎌倉は，京都とならび商業・文化の中心地として発達した。

そのことは出土駒にも如実に窺え前述した千葉地遺跡出土駒や，今回は触れる機会がなかったが，同遺跡近くの今小路周辺遺跡から「金将」の駒が1枚出土しており，出土例から対比しても京都とほぼ近い数を示し今後も期待できる。駒は都合5枚出土しており，中でも注目すべきは中将棋とはっきり判別出来る駒「鳳凰」〔図1-11〕の存在である。5枚のうち「鳳凰」を含めた3枚は，昭和54年度八幡宮第3次調査の際，溝の中に堆積した木器層から出土している。年代は共伴した陶磁器等から考えて鎌倉時代末期～南北朝頃と推定されている。「鳳凰」の駒は約1/2程度欠損しているものの，裏は「奔王」と墨書され明確に判読できる。大きさは残存で，縦2.9cm・底部幅1.7cm・厚さ0.8cmを測る。他2枚は，「歩兵」・「香車」と報告されている。「歩兵」〔図1-10〕は完存しており表「歩兵」裏「ミ」と墨書されている。大きさは，縦3cm・底部幅2.2cm・厚さ0.6cmを測る。「香車」〔図1-9〕は現在全く判読出来ないが出土した当時は「香」の字が，かすかに残っており「香車」と推定された。大きさは，縦3.3cm・底部幅2.1cm・厚さ0.65cmを測る。このほかに境内では2枚出土しており，1枚は「歩兵」〔図1-7〕，他の1枚は墨書があるものの判読は出来ない。「歩兵」の裏は，殆ど消えており若干「と」の面影がみられる。大きさは，縦3.1cm・底部幅2.3cm・厚さ0.8cmを測る。もう1枚の駒〔図1-8〕は，判読出来ないが墨痕から考えて「金将」の可能性もあり裏にも墨痕が認められるので中将棋の駒かもしれない。大きさは，縦3.4cm・底部幅2.3cm・厚さ0.8cmを測る。

長野・塩田城跡　〔所在地〕　長野県上田市大字前山字上町

〔調査年度〕　第1次調査昭和50年7月20日～8月12日　〔調査機関〕　塩田城跡発掘調査団

〔遺跡の種類〕　城跡・居館址　〔遺跡の年代〕　鎌倉時代～室町時代

〔遺跡及び出土駒について〕　塩田は「信州の鎌倉」と称されるように鎌倉～室町時代にかけて栄え，鎌倉幕府の重職北条義政がこの地に居を構え鎌倉的に発達した。その影響を受けてか駒が出土している。駒〔図1-14〕は表「角＝」裏「竜馬」と墨書されている。大きさは，縦4.1cm・底部幅2.8cm・厚さ0.5cmを測る。特徴は駒隅に棒線を示し駒の進む方向が理解しやすく工夫されている。棒線を施した駒は室町から戦国時代にかけて見られ後述する静岡・小川城跡，富山・弓庄城跡，福井・朝倉氏館跡，兵庫・御着城跡から出土している。

報告では福井・朝倉氏館跡に類例を求め中将棋に属する駒とされているが，表「角行」と考えるならば小将棋・中将棋の何れにも存在する駒なので結論は出せない。棒線を施した駒で明らかに中棋棋駒と判る例は，静岡・小川城跡，兵庫・御着城跡の2例であり，福井・朝倉氏館跡の「角行」・「酔象」と塩田城の例は判断出来ない。なお塩田城跡出土駒は鎌倉時代の所産と考えられ，棒線を施した駒では現在最古の例である。

小　　結

以上，若干時代の広がりはあるが平安時代～鎌倉時代と考えられる駒について例示した。わずかの資料からではあるが，出土例は都市に集中している。このことから見ても一般庶民に将棋はあまり普及していなかったと考えられる。また単純に考えて，まず文字を理解し，さらに余暇を営む時間がとれる条件を満たすだけでもかなりの制約がある。おそらく貴族・上級武士・僧侶等の階層でおこなわれたのだろう。将棋は覚えてしまえば簡単なゲームであるが初心者にとっては難しいものである。さらに中将棋に至ってはより高度なもので，駒の種類も多く行き方も複雑である。おそらく人類の考えだした盤上ゲームの中で一番複雑なものであろう。中将棋の起源は「二中歴」の記載にある将棊・大将棊から改良され平安時代末期から鎌倉時代初頭に考案されたのであろう。

〔室町時代～江戸時代の出土例〕

174枚と大量の出土をみた福井・朝倉氏遺跡を始めとし，これまで大都市に集中していた出土例が地方都市や城跡・館跡に求められるのがこの時期で，これまでの貴族・上級武士・僧侶等の階層からさらに下級武士・一般庶民層へ大いに将棋が普及したと考えられる時代である。

静岡・小川城跡　〔所在地〕　静岡県焼津市小川

〔調査年度〕　昭和56年～昭和59年　〔調査機関〕　塩田城跡発掘調査団

〔遺跡の種類〕　水田址・集落・居館　〔遺跡の年代〕　古墳時代～江戸時代

〔遺跡及び出土駒について〕　駒が出土したのは小川城跡の内堀からで，共伴遺物に木製品・土師器・墨書土器等が検出されている。駒の年代は15世紀後半～16世紀前半と考えられている。出土駒は3枚〔写真1〕で中将棋に使用されたものである。そのなかでも表「盲虎（もうこ）」裏「飛鹿（ひろく）」と墨書された駒は他に例を見ないものであり，大きさは縦3.5cm・底部幅3cm

第3図　中将棋駒配置図

第4図　中将棋成駒変化図

・厚さ0.5cmを測る。もう1枚は約1/3程度欠損しているが表「竜王」裏「飛鷲(ひじゅう)」と判読できる。大きさは未詳。他の1枚は完存しているが墨書は消えている。大きさは，縦3.5cm・底部幅3cm・厚さ0.5cmを測る。

島根・新宮党館跡 〔所在地〕島根県能義郡広瀬町新宮谷，大夫成。

〔調査年度〕 昭和54年 〔調査機関〕 島根県教育委員会

〔遺跡の種類〕 館跡 〔遺跡の年代〕 室町時代末，1554年以前。

〔遺跡及び出土駒について〕 新宮党とは，戦国大名・尼子経久の次男，国久を中心とする一族集団で，その居を構えたのが新宮党館であり天文23(1554)年尼子晴久に滅された館である。出土した駒〔図1-15〕は表「玉将」と墨書されており，大きさは残存で縦4.5cm・底部幅3.5cm・厚さ1.1cmを測る。時代は1554年以前で，共伴の陶磁器から判断しても16世紀中頃以前に位置づけられる。駒の寸法は従来の出土例に比して大きく肉厚の駒である。この駒を筆頭にして朝倉氏遺跡第49次調査，東京・葛西城跡，京都・平安京西洞院，京都・御土居遺跡等の出土駒に見られる特徴で，駒尻がぶ厚く先端部が薄くなる。いわゆる，駒自体の傾斜のきつい尻太の駒である。

富山・弓庄城跡 〔所在地〕 富山県中新川郡上市町館。

〔調査年度〕 昭和58年 〔調査機関〕 上市町教育委員会 〔遺跡の種類〕 城跡

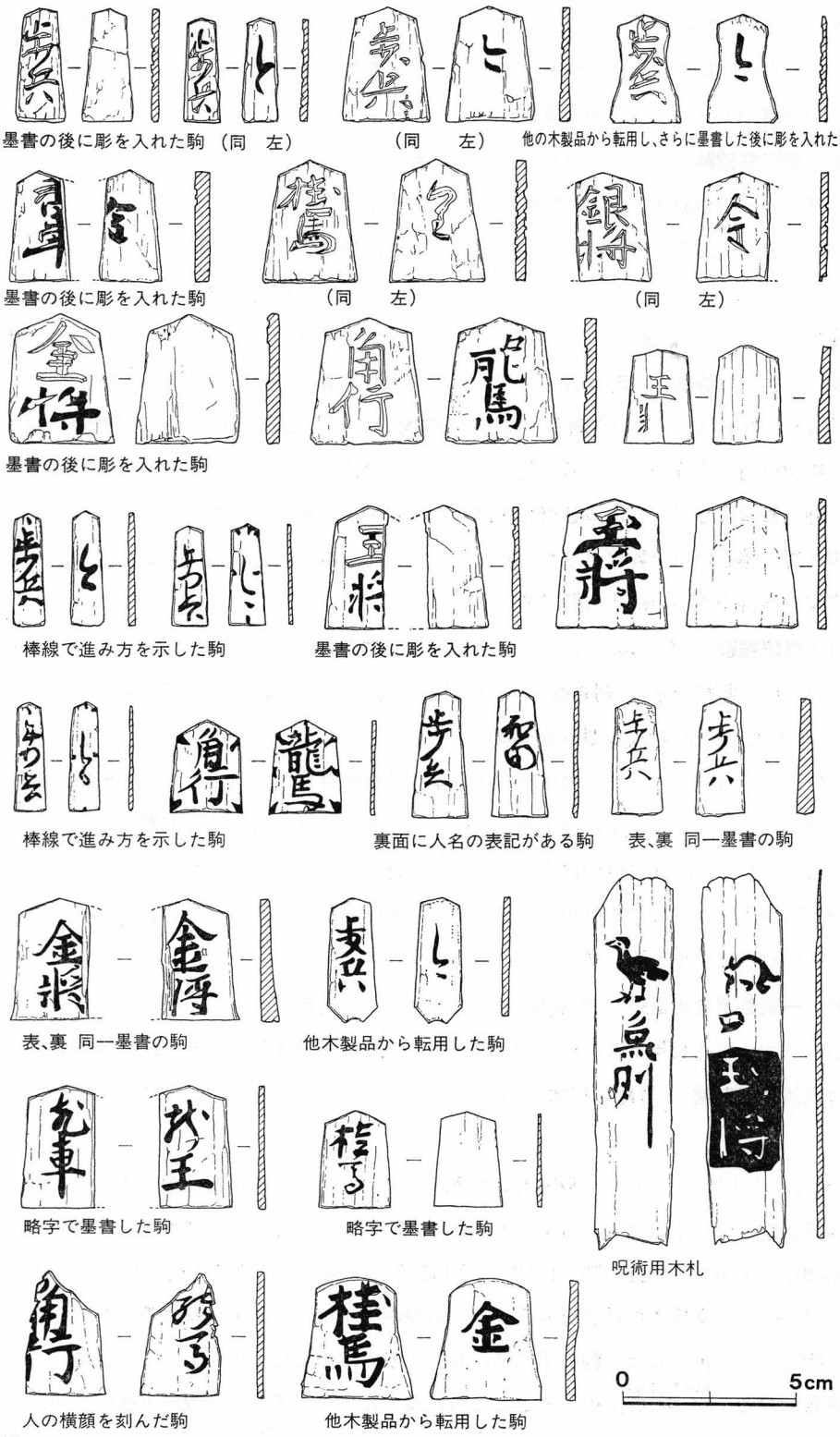
〔遺跡の年代〕 室町時代末期～戦国時代

〔遺跡及び出土駒について〕 弓庄城跡本丸南側曲輪の井戸から出土し，共伴遺物に櫛・ヘラ状柄杓といっしょに出土。出土地点及び他の遺物から見て室町時代末期～戦国時代のものと考えられる。駒〔図1-16〕は表「銀将」裏「ひ」と墨書されていた。大きさは，縦2.8cm・底部幅1.9cm・厚さ0.1cmを測る。特徴は棒線で駒の進む方向を示している点で，後述する朝倉氏遺跡出土駒に見られるタイプのものである。

福井・一乗谷朝倉氏遺跡 〔所在地〕福井県福井市城ノ内町

〔調査年度〕 昭和42年より継続 〔調査機関〕 足羽町教育委員会 朝倉氏遺跡調査研究所 朝倉氏遺跡資料館 〔遺跡の種類〕 中世城館・城下町 〔遺跡の年代〕 15世紀後半～1573年

〔遺跡及び出土駒について〕 戦国大名朝倉氏が五代にわたり居住した館跡及び城下町で朝倉義景が織田信長に滅ぼされるまでの約百年間，越前の中心地として栄えた。駒の出土は昭和48年度・第9次調査の時で174枚，昭和59年度・第49次調査で4枚を数える。第9次調査出土駒は朝倉氏本館の土塁外側をめぐる濠の中より，土器・金属器等の混在した多くの遺物とともに出土した。駒の年代は，共伴の墨書木製品に「少将」の木札があり「少将」が義景の愛妾「小少将(しょうのしょうしょう)」のことと考えられることから，年代の下限を永禄10(1567)年前



第5図　朝倉氏遺跡第9次調査出土駒

後の時期においている。今回出土の174枚については「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ」に譲るとして主な物については図2を参照していただきたい。第49次調査では黒漆書きの「歩兵」が礎石建物跡(SB2890)西辺部より蒔絵の櫛，羽子板等といっしょに出土している。大きさは，縦2.8cm・底部幅1.9cm・厚さ0.1cmを測り，漆書きの駒では最古の例である。またこの他に香車・金将・王将が検出されている。今回の「歩兵」・「香車」〔図1-18,19〕は第9次調査で出土した174枚の駒には全くないタイプの駒で高級駒の部類に入る。出土駒に類例を求めれば時代はやや下るが，東京・葛西城，京都・西洞院，京都・御土居出土駒〔図1-23,24,25〕に見られる肉厚の駒尻が太いタイプのものである。出土駒ではないが，伝世品として大阪府・島本町水無瀬神宮所蔵の駒がその最たるものであり，いわゆる「水無瀬駒」と呼ばれているものである。これは近代将棋駒の源流と考えられ，初めて駒を整形する職人と駒文字を書く能書家の分業により大量に製作されたものである。また同神宮所蔵の「将棊馬日記」は天正18(1590)年から慶長7(1602)年に至る将棋駒製作記録である。記録によれば総計735組・37,108枚にもおよび，その注文主も秀吉・家康・をはじめ有力貴族，戦国大名の名があり普及範囲が如実にわかる。おそらくこの以前にも駒を製作していたであろうし，水無瀬家以外の他家でも製作されていたにちがいない。この点から考えても第49次調査出土の黒漆書きの「歩兵」は，水無瀬タイプの駒に先行するものであり，既に15世紀後半には漆書きの駒が製作されていたことを示す格好の資料といえる。出土駒174枚中「酔象」〔図1-17〕は1枚のみ見られるだけであり，他に中将棋の駒も検出されていないことから，現行の将棋より古い将棋に存在したと考えられている「酔象」の可能性も少しはあるが断定はできない。元禄9(1696)年刊の「諸象戯図式」(注7)の小象戯の註記に「天文年中，後奈良帝，日野亜相藤の晴光，士林の伊勢守の貞孝らに命じて酔象を除く者なり」とする記載がある。またこれを根拠に現行の将棋の王将の上に，酔象が配された形の計42枚の駒を使う将棋があったとする説がある。しかし「諸象戯図式」の小象戯の註記自体もかなり怪しい部分もあり根拠もさだかでない。ゆえに42枚制の将棋自体の存在が危ぶまれ現段階では確証がない。

隼上り遺跡　〔所在地〕　京都府宇治市菟道東隼上り31

〔調査年度〕　昭和58年10月20日～59年3月31日

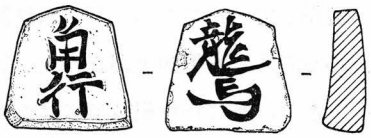
〔調査機関〕　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〔遺跡の種類〕〔遺跡の年代〕　飛鳥時代～江戸時代

〔遺跡及び出土駒について〕　本稿脱稿後，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査員小池寛氏より駒出土の情報を得た。急拠まとめたので遺跡遺構等の補遺は「京都府遺跡調査概報第11冊」を参照いただきたい。概要については，飛鳥時代の瓦窯・工房等が確認さ

れた隼上り瓦窯跡や白鳳時代に創建された大鳳寺跡に関連する遺跡として調査された。駒の出土した土層は近世の遺物包含層で，共伴遺物の陶磁器から見て江戸時代末期の所産と考えられる。特筆すべきは此れまで例を見ない陶器製の駒である点である。駒は，染付陶器の類に入るもので，白地に青色の文字が記されており，表「角行」裏「龍馬」とはっきり読み取れる。形は底部がやや幅ひろ五角形を呈し，焼け歪みのせいか上面が湾曲している。大きさ縦3.3cm・底部幅3.4cm・厚さ1cmを測る。

水無瀬駒（伝関白秀次愛用の駒）



隼上り遺跡出土駒実測図 S＝$\frac{1}{2}$

ま と め

以上，主な遺跡及び出土駒についてまとめてみたが，紙面の都合上すべての出土例は紹介出来なかった。また最近の例もあり詳細なデーターも提供していないが，出土例から考えられる若干のまとめをしてみたい。時代的に見て，平安時代から鎌倉時代に至る駒の特徴をまとめると次のようになる。

① 五角形の先端部と底部の幅がほぼ同じで，厚さもやや先端部が薄くなるものの底部との差は少ない。

② 駒文字の表記方法についてはすべて墨書で書かれており，漆書の駒や彫り駒の例はない。

③ 裏面の文字は一字の場合，上半分に詰まり下半分があいている。これは下半分に指が触れる機会が多いため，手ずれによって生じる墨書の摩滅を防ぐための工夫と考えられる。

④　駒の大きさは，縦3cm前後・底部幅3cm前後・厚さ0.5cm前後の範囲に納まる。

これと対比して室町時代から江戸時代に至る駒の特徴をまとめると次のようになる。

①　特に室町時代から戦国時代にかけて駒が大形化し厚さも1cmを越えるものが出てくる。

②　駒形の五角形の底部と先端部の差が広がる。厚さも同様底部と先端部の差がつき駒尻が厚くなる。

③　駒文字の表記方法も墨書以外に漆で直書したものや，墨書の後彫りを施した駒が現れてくる。

④　駒文字以外に棒線を記し駒の進みかたを示した駒が現れてくる。

⑤　駒製作において専門職人の手を経たものや，また逆に井戸枠やヘギ板を転用した簡素な素人の手作り駒が現れる。

⑥　木製の駒以外に陶器の駒が現れる。

以上が主な特徴であるが，もちろん例外もあり今後の資料の増加による修正も当然ありうるが，現段階での評価及び予察と見ていただきたい。

今回は，出土駒にのみスポットをあてたため他の共伴資料や遊戯具についての叙述はさけたが，密接な関係にあることはいうまでもない。また一点だけ駒以外について述べるとすれば，朝倉氏遺跡出土の呪術資料〔図2〕である。呪術資料は木簡状を呈し一部は欠損している。大きさは残存で縦10.4cm・横2.3cm・厚さ0.1cmを測る。表は鳥の絵に「魚」と「則」の墨書があり，裏は兎・蟾蜍と思われる絵があり，その下に「玉将」の駒が白黒逆に描かれている。今の所他に例を見ないものであり，何を意図として作られたのか即断は避けたいが物忌札[注8]に類したものかもしれない。物忌札のなかで「堅固物忌」と記し，その下に「九九八十一」「八九七十二」を逆書きし，陰陽順逆相生相克の理を表す反魂符と考えられているものがある。将棋盤のマス目は9×9で81あり，「九九八十一」の代用と仮定し，「玉将」駒の白黒逆の絵を陰陽順逆と考えれば物忌札の類かもしれないが，かなり怪しい。ただ将棋の駒を占いに用いた例は文献にあり，源師時の日記「長秋記」[注9]大治4(1129)年五月二十日の条に「新院御方有覆物御占、覆以将棋馬、其数十二也、……」と記され，新院とは鳥羽上皇であり，将棋馬はもちろん駒のことである。今回の出土例で駒が占いや呪術に使用されたと考えられる例は見出せなかったが，単に駒が出土した事実だけで直ぐに将棋を指していたと判断する怖さを実感した。占いや呪術に使用された駒は少ないであろうが留意点として残したい。

以上やや雑感的なまとめとなり多くは語れなかったが，これを契機に資料として将棋の

駒が木簡なみに取り扱われれば幸いである。なお文末ながら拙稿をまとめるにあたり，出土駒の実測図及び写真等の資料の提供及び協力を得た，福井県朝倉氏遺跡資料館及び同研究所・(財)京都市埋蔵文化財研究所・富山県，上市町教育委員会・焼津市歴史民俗資料館・東京都教育委員会，及び関係各機関に謝意を表したい。

（小泉信吾＝将棋博物館学芸員・元当センター職員）

注1　チャトランガ，正方形を用い4人で遊びサイコロを使用する盤上遊戯。
サンスクリット語で Chaturanga と呼ばれた。「A History of Chess, H. J. Murray, Oxford. 1913」による。

注2　三蹟の一人，行成は書道世尊寺流の開祖で多くの本を著した。書法や用具の選択を記した「麒麟抄・第七巻」に記されている。「麒麟抄」『続群書類従』第三十一輯下・日本書画苑

注3　二中歴は，「掌中歴」「懐中歴」の二つを合せて作られた歴史・習俗事典で，第十三博棊歴に将棊の項があり将棊・大将棊について駒の配置及び進み方が記されている。

注4　金正基「新安海底文化財發掘」『文化財』第十一號　文化財管理局

注5　「泉州湾宋代海船発掘簡報」『文物』1975年10期

注6　聞香　平安時代の物合せの一つに「薫物合」があり，その様子は「源氏物語」梅ケ枝の巻に記されている。鎌倉時代には禅宗の影響を受け香木の香りを探究する「香合」になりさらに室町時代になると数種類の香木を使い，より高度なものへと複雑化し「組香」に発達した。組香には十種香・宇治山香等があり，そのさいに香札を使用する。

闘茶　南北朝期以降に盛んになった茶勝負，賭物をかけ茶寄合の場で茶種を飲み分けることを競ったもの。そのさいに札を使用する。

注7　「諸象戯図式」元禄9(1696)年西沢太兵衛　梓

注8　志田原重人　研究報告「中世遺跡出土の呪符」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　昭和57年3月第4回中世遺跡研究集会　中世の呪術資料　1984年6月2・3日

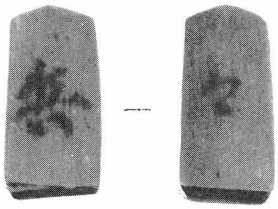
注9　「長秋記」増補史料大成　臨川書店　1975年

＜参考文献＞

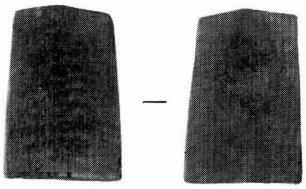
『御着城跡発掘調査概報』姫路市教育委員会　昭和56年3月
『鳥羽離宮跡調査概報』京都市埋蔵文化財調査センター　昭和55年3月
『増補改編　鳥羽離宮跡』1984　京都市埋蔵文化財研究所　昭和59年11月
『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所　昭和59年3月
『特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡Ⅴ　―昭和48年度発掘調査整備事業概要―』福井県教育委員会　朝倉氏遺跡調査研究所　昭和49年3月
『特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡XVI　―昭和59年度発掘調査整備事業概報―』福井県教育委員会　朝倉氏遺跡調査研究所　昭和60年3月
『特別史跡　一乗谷　朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ　―朝倉館跡の調査―』福井県教育委員会　朝倉氏遺跡調査研究所　昭和60年3月
『玉津田中遺跡調査概報　Ⅰ　―昭和57・58年度確認調査概報―』兵庫県教育委員会　昭和59年3月
『鶴岡八幡宮　発掘の記録』鶴岡八幡宮発掘調査団　昭和55年3月
『掘り出された鎌倉　新発見の鎌倉遺跡と遺物展・図録』鎌倉考古学研究所　昭和56年8月

『難波宮址の研究　第７　報告編』財団法人大阪市文化財協会　昭和56年３月
『富山県上市町弓庄城跡第４次緊急発掘調査概要』上市町教育委員会　昭和59年３月
『青戸・葛西城址Ⅱ区調査報告』葛飾区・葛西城址調査会　昭和51年４月
『塩田城跡第一次発掘調査概報』上田市教育委員会　昭和51年３月
『新宮谷遺跡発掘調査報告』島根県広瀬町教育委員会　昭和57年３月
『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報　1980　草戸千軒町遺跡　―第28・29次発掘調査概要―1980』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　昭和57年３月
『第４回中世遺跡研究集会　中世の呪術資料』1984年６月２・３日　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

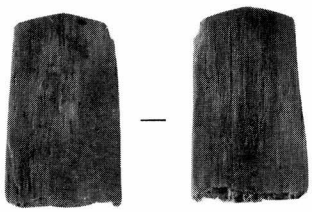
図版　駒の出土例とその意義



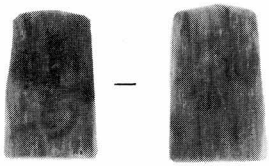
山形・城輪遺跡



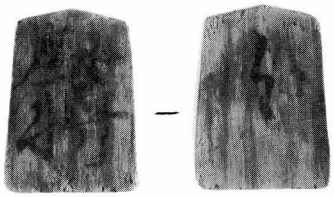
京都・鳥羽離宮跡第77次



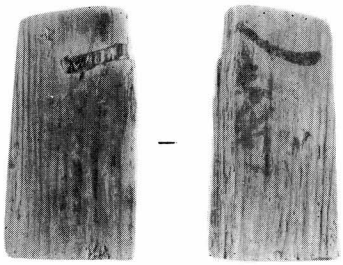
（同　　左）



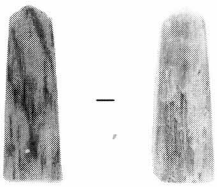
兵庫・玉津田中遺跡



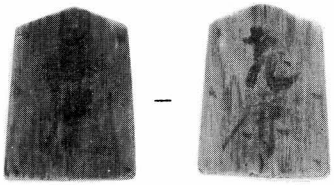
京都・鳥羽離宮跡第54次調査



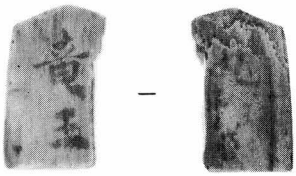
京都・鳥羽離宮跡第59次調査



静岡・小川城跡

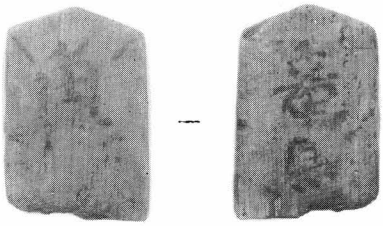


（同　　左）

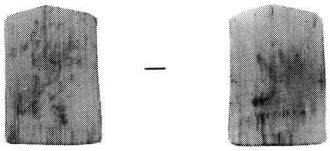


（同　　左）

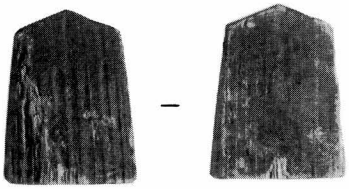
京都・猪熊殿跡



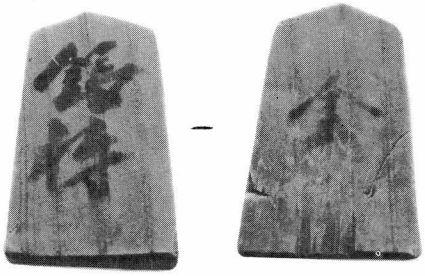
長野・塩田城跡



富山・弓庄城跡

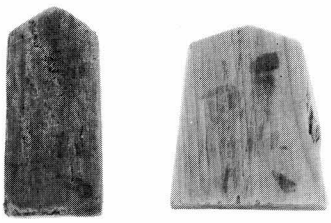


京都・西洞院

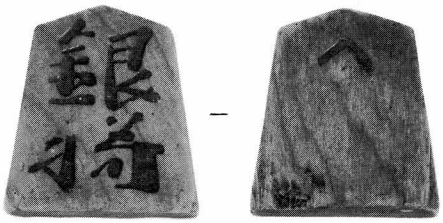


東京・葛西城跡

（同　　左）



京都・御土居跡



（同　　左）

（同　　左）